

ラジオ放送
＜令和6年7月～9月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.448

もくじ ~ contents

<こころの散歩道>

☞ 軽い音楽に乗せたちよつといい話

- 支え、支えられ page 1

<先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です。

- すべては天地の物（もう一度聞きたいあの話） page 5
東京都・大崎教会 田中元雄

<こころの散歩道>

- 雨あがりの道を歩いて page 9

<先生のおはなし>

- 芽生えに培う親として（もう一度聞きたいあの話） page 13
大阪府・佐野教会 福嶋和一

<教師インタビュー>

☞ 金光教の先生へのインタビュー番組

- 8月6日を語り継ぐ page 17
広島県・鯉城教会 白神亜礼

<平和>

☞ 戦争体験者のお話

- 仲良うに暮らしたらええのに page 22
兵庫県・出石教会 山本登代

- それが戦争 page 27
兵庫県・三田教会 稲葉聰子

<教師インタビュー>

- かけがえのないわが子 page 31
岡山県・乙島教会 岩本信治

<あなたへの手紙>

☞ 悩みや疑問にお答えします。

- 第1回 生きる楽しみがない／整形しようかな page 36

- 第2回 父が免許を返納しない／子どもの病気が怖い page 40

- 第3回 結婚式をしない娘／コロナ禍と物価上昇で閉店 page 44

- 第4回 長生きしていいことがある？ page 48

／お墓のことが気掛かり

<先生のおはなし>

- 心の通い（特選アーカイブス） page 52
兵庫県・鶴甲教会 田中潤

《こころの散歩道》

「支え、支えられ」

ある日、小学6年生の女の子Aちゃんが、私の奉仕している教会にお参りに来ました。明日から修学旅行に行くとのことで、神様をお願いをしにきたのです。楽しみにしていたので、う、うれしそうに旅行の日程を教えてください。「元氣に行けますように」と、お願いしました。ただ一つの心配は、バス酔いのことでした。私はAちゃんにこう言いました。

「バス酔いを心配している子は、他にもいると思うから、その子たちのことも一緒に祈りしてあげましょうね。あなたのことは、神様がちゃんと守ってくださいるから、心配いりません

よ」

そう言うと、さらにAちゃんは、こう願いました。

「クラスに、学校に行けなくて休んでいる男の子がいます。その子も一緒に参加できますように」

その子のことは、クラスの間みんなも気にかけていて、修学旅行に参加できるようにと手紙を書き、先生に家へ持って行ってもらったそうです。

数日後、修学旅行から帰ったAちゃんは、お土産を持って、お礼のお参りに来ました。残念ながら、その男の子は、修学旅行には参加しなかったそうです。しかし、クラスの間みんなが、「修学旅行に来てほしいな」と気にかけていた

こと。また、Aちゃんの神様をお願いしようという、豊かで大きな祈り。素直に人のことを思い、祈ることができる。それはとても尊いことだと、胸が熱くなりました。

さらには、旅行中の夜、お腹が痛くなった子がいいて、Aちゃんは、その子の看病をしてあげたそうです。自分も眠たかっただろうに、友達の看病をしてあげたことに、感心しました。2日目は睡眠不足にも関わらず、心配していたバス酔いもせず、楽しく無事に修学旅行から帰ってきたのでした。

友達のことを思い、親切を尽くし、行動に移すことのできる素晴らしさを感じました。

*

中学3年生の娘は、新学期から友達のグルー

プ間でのトラブルが元で、学校に行けなくなっていました。

本人は、何とか頑張って行こうとするのですが、朝になると気持ちがいそぐなくなり、なかなか学校に行くことができません。親としても、2年生までは普通に行けていただけに、どうしたかとか心配で、トラブルが一日も早く解決して、登校できるようにと、祈るばかりでした。

そうした中、学校や担任の先生の配慮で、教室で授業を受けるのではなく、別の部屋で学習してみることにしました。1時間だけでも、2時間だけでもいいから、学校に行くように努力していきました。

そして2カ月ほど経った頃、意を決して、クラスに行ってみようと学校に出かけました。で

も、なかなか自分のクラスに入れません。校舎内をうろろしている、他のクラスの友達にばったりと会いました。するとその友達が、「心配してた！ 学校に来てくれてうれしい！」と涙を浮かべて喜んでくれたのです。娘は、友達がこんなにも心配してくれていたんだと分かり、そのことがすごくうれしく思えて、だんだんと前向きな気持ちになりました。

それまで、娘は悪い事ばかりを気にしていました。しかし、このことで人の思いや優しさに気づくことができました。友達から励ましのメールをもらっていたこと。ノートやプリントを家に届けてくれていたこと。たくさんのことをありがたいことと思い返せるようになりました。

そうしているうちに、だんだんと、教室で授業を受けられるようになっていきました。そして、一学期の最後の頃には、一日中、教室で授業を受けられるようになりました。

友達のグループ間でのトラブルから始まった不登校でしたが、その解決の糸口は、自分のことを心配してくれていた、友達の思いに触れたことでした。そして娘は、家族をはじめ、学校の先生や友達に、支えてもらっていたことを知りました。

その後のことですが、他にも友達で、学校に行けない子がいて、娘はどうしているかと、おやつの差し入れを持って、その子の家を訪ねました。自分のつらかった経験をとおして、しんどい思いをしている友達に、思いを寄せること

ができるようにもなっていたのでした。

*

娘は、その間に実施された修学旅行にも参加
できませんでした。思い出となるはずの修学旅
行に行けず、残念だったことでしょう。しかし
私は、娘がこの経験をとおして、大きく成長さ
せていただいたと信じています。人の思いや優
しさに触れ、助けられたこと。人への思いやり
と感謝が生まれたこと。それは、娘の心の成長
に繋がったと思うのです。

人と人とは、思いやりの心によって、「支え、
支えられている」お互いだと思っています。

今日も、人を大切にすることを、人に支
えられている喜びと、感謝の一日でありますよ
うに。



《もう一度聞きたいあの話》

「すべては天地の物」

東京都・大崎教会 おおさき 田中元雄 たなかもとお

(昭和53年4月5日放送)

狭い道路を隔てて、小学校の向かい側にお店を構えた太田さんは、今年で63歳です。何人も人を雇っていますが、今でも毎日、ほうきを持って店先を掃除しています。店先ばかりではありません。小学校の前の道も、毎朝掃き清めています。そのことについて太田さんは、このように言っています。「学校へ通う子どもさんが、少しでも気持ち良く通学できて、その日一日、元気いっぱい勉強に励むことができるようにと、願いながら掃かせていただいています」

ところが、ある日突然、その小学校の教頭先生が太田さんの留守中、店へ怒鳴り込んできたのです。教頭先生は荒々しい口調で、「お宅の車が、学校の門の前に止めてあるので、邪魔になって給食が運べないじゃないですか。困りますよ。すぐに車を移動してください」と言ってきました。給食の食料を運んできた人が、給食のおばさんに文句を言い、おばさんの訴えを聞いて、教頭先生が直ちに太田さんの所へ、怒鳴り込んだらしいのです。ところが、たまたまその日は、学校の前の通りが、下水道工事の真っ最中で、太田さんの店のそばには溝が掘られ、土が山のように盛られており、他に自動車を置く所がなかったのです。この様子を見れば、あんなふうな文句を言わなくてもよさそうなもの

だがなあと思いつながら、息子さんが車をすぐに他へ移しました。

このことを聞いて、太田さんはカッとしました。「学校のことでは、今まで何かと一家をあけて協力してきたのに、何という言い草だ」と怒ったのです。その翌日、道路のこちら側は掃いても、学校側の半分は掃かない、というささやかな抵抗を始めました。その翌日も、また翌日も、道路の半分だけ掃除していました。

4日目のことです。いつものようにほうきを握っていた太田さんの心に、ふと、ある思いが込み上げてきました。「私は、こうして自分の家の前だけを、意固地になつて掃いているけれども、この天地は、言ってみれば、神様のお土地ではないか。神様のお土地を清めさせてもら

うのに、あちら側もこちら側もあるはずではない。常に金光教の教会へ参り、いつどこにいても何をしていても、神様の中にどっぷりとつかっているのだと教えられていながら、なんと、自分は狭い了見を持つていたんだろう」と、胸に熱いものが込み上げてきました。太田さんは過去3日分も掃除するつもりで、一生懸命に掃きました。自分の心の中のほこりも清められる思いでした。

その日の午後のことです。校長先生が、「あそこに車を止めていたのは、事情があつたにも関わらず、教頭が調べもせず文句を言ったことは、相済まないことでした。その間だけ移動していただくよう、お願いすべきでした」と言つて謝りにみえました。太田さんは、「いいい

「え、こちらにも落ち度があったことです」と答えながら、心の内に、「私の狭く、片意地な心が解きほぐれただけで、神様がこのように和解の道をつけてくださった。ありがたい」と感謝の気持ちでいっぱいでした。

太田さんが言われるように、私たちは何でも、私の物と他人の物という見方しかできない傾向があります。そして、少しでも多くの物を私の物にしたがるところもあります。私たちの物、みんなの物、さらに言えば、天地の物という見方が欠けています。例えば、駅に置いてある鉛筆やボールペンは、紐でくくりつけられていません。そうしなければ、どんどん無くなってしまいうからです。自分さえ良ければいい、という風潮の現れでしょう。

ルネッサンス期のヨーロッパのある都市には、後世、「人類の遺産」といわれるような彫刻の施された泉が、都市のあちこちの広場にあり、みんながそこで憩い、遊び疲れた子どもたちが、水を飲んでいたということです。そのように大らかな、天地の中で、お互いに生きるという社会が、今の私たちにとっては、夢物語のように聞こえるのは残念なことです。

みんなの物、天地の物という見方、考え方を失ってきたというのも、一切の物を金に換算して、高価な物を貴い物とし、金さえあれば何でも自由になると考え、金を拝むというような、現代人の金に対する盲信が、人間と人間との温かい心の通い合いを、奪ってきたからではないでしょうか。金や物に対する執着は、さらに学

歴や医者の資格、そして善意、愛情から人の命まで、金で買えるかのように錯覚させるほど、歪んだ精神を生み出しています。

お金は大切なものです。使い方によっては素晴らしい働きをします。ところが、全てものを金に置き換え、金さえ手に入れば、他のことはどうでもよいということになってしまえば、人の親切や思いやりを、理解できない人たちがいっぱいの世の中になる恐れがあります。雑巾もダイヤモンドも、どちらも同じように貴いのです。なぜならば、雑巾にダイヤモンドの輝きはないけれども、ダイヤで床を拭くことはできないからです。全てのものは、それぞれの役回りを持って価値があり、少し広い目で見てみると、それらはみな天地の物だからです。

金光教祖は、「真まことの道を行く人は、肉眼を
おいて心眼を開けよ」と教えています。不況にあえぐ私たちは、「消費は美德」から一転して、生活の無駄を省こうと儉約に努めていますが、ただ単に、出費を抑えるためにとりだけ、儉約ということを考えるのでなく、全てのものには命があり、その命が生ききるような扱い方、接し方ができるような心の眼を開き、人間としての真実な生き方をしたいものです。

「雨あがりの道を歩いて」

大雨、猛暑に、事件事故……。暗いニュースに、うんざりしていたところへ、長年担当してきた部署が、なくなることになってしまった。おまけに、大学生の娘の就職も、なかなか決まらない。気持ちには沈み、先への不安は募るばかり。家の中でもため息が増え、きつと嫌な空気をまき散らしていたのだろう。「雨が上がったから、少し歩いてきたら！」と、妻に追い出されるようにして、散歩に出かけるはめになってしまった。

散歩のコースを決める暇もなく、外へ出された私は、足の赴くまま、線路沿いの道へと向かっていった。そこなら、好きな電車を眺めながら歩くこ

とができる。

*

あれは、いつ頃だったのだろう。線路沿いの道を、祖母と歩いたことがある。若い頃の祖母は、市場へ行く時、人通りの少なかつたこの道をわざわざ選んで歩いたという。空襲で家が焼けた後、戦争は終わったけれど、乳飲み子を含む大勢の子どもを抱えていた祖母。僅かなお金を何とか工面し、線路の向こうに見える市場へと、「買えるものがあるだろうか」と、案じつつ向かう。途中、人知れずこの線路端にしゃがみ込み、「どうぞ子どものために、何か栄養のあるものを買うことができますように……」と、心の中でお願いしていると、拭けども拭けども、涙が溢れたのだという。生活の苦しさ、先への不安。言葉にもならない思いが

涙となって、祖母の心から溢れ出ていたのに違いない。いつも穏やかで優しい祖母に、こんなにもつらい時期があったのかと、私は子どもながらに驚いたのだった。返す言葉もなく祖母の顔をのぞき込んだら、にっこり微笑んで、「今は、いい時代。幸せやねえ」と、つぶやいた声が忘れられない。

*

歩きながらふと見上げると、雨上がりの夕空が美しい。祖母より少し年下だった賀子よしこさんが亡くなった夕方も、こんな空だった。「過ぎたることを

思い出して苦をするな。先を樂しめ」「悪いことを言って待つなよ。先を樂しめ」。これは、戦後の苦しかった時代に、祖母と知り合った賀子さんが、手記に書き残していた、金光様の教えの言葉だ。

苦しかった日々を生き抜き、孫にも恵まれ、107歳

の天寿を全うした、賀子さんの人生の支えになっていたという。賀子さんと信心仲間だった祖母も、「苦をするな、先を樂しめ、先を樂しめ」と、自分に言い聞かせて涙を拭い、線路の向こうの市場へ向かっていたのだろうか。

私も、祖母たちのまねをして、「先を樂しめ、先を樂しめ」と、心の中でつぶやきながら、足の向くまま雨上がりの道を行く。気がつくとき、足取りが少し軽くなったように感じられ、気分も何だか晴れてきた。

*

家を出た時には、近くをひと回りして帰るつもりだったが、あいにく、踏切の遮断機が下りている。電車の本数が多くなる夕方だから、きつとしばらく待たねばなるまい。私は、もう少し足を延

ばしてみることにした。進んでいくと、児童公園にたたずむ、ゴリラのオブジェが見えてきた。遊具でもないゴリラが特徴的なこの公園。そういえば、就職が決まらず落ち込んでいる娘が小さかった頃、連れてきて遊んだことがあった。

その頃、娘は、幼稚園の保育室に入るのを嫌がって、連日、園長先生のそばで過ごしていた。高校入試は、まさかの不合格。滑り止めとして受けた学校に、これ以上ないというほど暗い顔をして通い始めた姿も忘れられない。その娘が、大学では、自らゼミの学生をまとめる役を買って出たのだという。そうだ、そのうえ就職活動では、不採用の連絡ばかりが届くのに、「お父さん、この会社はどうだろう」と、すぐに気持ちを立て直し、頑張っているではないか。

「仕事のことも、大丈夫。何とかなる」。そんな気がしてきた私は、「先を楽しめ、先を楽しめ」とつぶやきながら、少し早足になってわが家へと向かった。

*

「ただいま」。我ながら驚くほど明るい声が出た。追い出されるようにして出かけた散歩は、一時間を優に超えていたらしい。のどを潤そうと、リビングへ行くと、出かけにはなかった、かわいらしい花束が置かれている。

「あの子の就職、内定が出たらしいわ。外からメールをくれていたけど、気がつかなくて…」と妻はうれしそうだ。「この花束、ついさつき、幼なじみのお友達が、わざわざ持って来てくれたの。就職のお祝いなんだって」と、にこにこ笑顔で教

えてくれたのだった。

*

冴えない気分でしぶしぶ歩き始めた、今日の私の散歩道。「人生、厳しいこともあるけれど、先を楽しみにして生きていけ。道は開けるのだから」と、勇気づけられながら歩いたのは、神様が用意してくださった、「このころの散歩道」だったに違いない。



《もう一度聞きたいあの話》

「芽生えに培う親として」

大阪府・佐野教会 福嶋和一ふくしまわいち

(昭和52年3月23日放送)

春は、草木が芽生え育つ季節であります。子どもたちもまた、もうじき訪れる4月の入学、進級、進学ということで、芽生え育っていくという感じがいたします。一年一年成長していく子どもの姿を見ていると、親としては大変ですが、うれしく楽しみなことであります。

ある町で、文房具店を営んでいるSさんは、店に学用品を買いに来る、若いお母さんや、お父さんを捕まえては、次のような話をよくするのだということです。

「子どもが幼い間は、世間のことわざのように『はえば立て、立てば歩めの親心』で、ああもしてやろう、こうもしてやろうと、親は心を配って、しつけもし、育てもします。たとえば、子どもがうるさがつても、文句を言っても、立派な人間になつてほしいと願つて、それが少しも苦になりません。親ばかりかというか、不思議なものです。ところが、子どもが大きくなつてきますと、親として、苦になることが増え、時には、腹の立つことさえあります。これほど、この子のために思うてやっているのにと……。今のあなたには、お分かりにならないかも知れませんが、子どもを育てることが苦になってきたら、一度、育てることをやめて、親とは何か、考えてみられるといいですよ。私は、息子のことで

失敗しました。遅まきながら、今、親としての私を反省しています。そうして、息子が本当に立ちゆくことを願っているのです」と、Sさんは、にこにこしながら、手作りのカードを品物に添えて、お客さんに渡すのだということでした。

そのカードには、ペンで、「ちちははも 子どもと共に 生まれたり 育たねばならぬ 子もちちははも 金光教教主の御歌^{みうた}」と書いてあります。

Sさんは、息子さんのことで、次のようなつらい経験を持っているということでした。それは、親として、わが子への深い愛情と、大きな期待から出てきた事柄であったかも知れません。小学校しか卒業していないSさんは、息子だけは大学までと願ひ、一流の私立中学、一流の高等

学校へと、エリートコースに乗せました。息子さん自身も、最初は一生懸命だったということでした。ところが、どこで狂ってきたのか、勉強しなくなり、注意すると反抗するし、ついには暴走族に加わり、家庭裁判所から、何度呼び出されたか分からないほどになったといひます。

彼女ができて、ほとんど家に帰らないという状況が続き、毎日毎日、息子さんのことで商売も手につかなくなり、苦労したということでした。思いあまったSさんは、近所の金光教の教会を訪ねて、「相談に乗ってください」と願われました。

親と子、と一口に言いますが、それぞれの親と子とが生きるということを考えてみますと、本当に大変なことです。息子がどんなことを引

き起こしても、親であることをやめるわけには
まわりません。その問題をもつて、親として生
きてゆくほかありません。

Sさんは教会に参拝し続け、いろいろと教え
を受けてゆくうちに、親としてのあり方の間違
いに気づいたと、次のように話していました。

「子どもの幼い間は、親が守つてやり、人と
して立派に育つてくれるように願ひ、しつけれ
ることが大切かも知れません。しかし、子どもに
は神様が、自ら育つ働きを与えてくださってい
たことを、私は見落としていました。私の子ど
もを見る見方、接し方が、小さい時の子どもを
見る見方、扱い方から一步も進んでいなかった
ことに気づいたのです。盆栽をご存知でしょう。
あれは苗木の時から、鉢に植え、枝はこうい

ように、幹はここで曲げてと、針金でがんじが
らめにして、何年もかけて作つてゆく芸術品で
す。しかし、自然に備わつた苗木の性質に逆ら
つたのでは、いい盆栽にはならないそうです。

私は、息子が持つている性質に逆らつて、知ら
ず知らずに、つまらない盆栽にしようとしてい
ました。ましてや、息子は植木とは違います。
大きくなれば、独立した考えを持ち、自身で生
きてゆく力も育つてきています。それを親の考
え方という鉢に植え、ああでなければ、こうで
なければと、しぼりつけようとしていたわけで
す。それでいて、私は親として、どれほどの親
でもなかったわけです。私は息子を呼んで、私
の間違ひを話し、詫びました。今はただ、息子
の立ち直りを願ひ、親としての本当のあり方を

求め続けている毎日なのです」と、Sさんはこのように話していました。

金光教の教祖は、訪ねてくる人々に、子どものことを、「若葉わかば」と呼んで、その自然な成長を大切にすることを教えています。教育についても、「手習い・読み書き・算盤そろばんは、したい者から次第に習わせてやれ」と論じています。子どもへの心に芽生えてくる自然な要求に応じて、それを摘み取ることなく、急がず、順々に教えてゆくということでしょう。そして、「子ども繁盛を願え」と教えていますが、子どもの真まことの立ち行きを願っていく親になる、そのことが大切だと教えています。

とかく私たちは、あまりにもせっかちになりがちであり、自然な動きに逆らって事を構えて、

事をなしがちであります。そして、子どもが育ってきたことへの感謝と、自分が子どもの親になつていくことへの努力を差し置いて、私が子どもを育ててきた、完全な親だというような顔をして、子どもに無理強いしている面があります。それが、たとえ現代の風潮だとしても、子どもの真まことの立ち行きを願い、それを中心に考えてみますと、自然の働きに礼を申し、広く大きな心でありたいものです。そして、金光教の教主が、「ちちははも 子どもと共に 生まれたり 育たねばならぬ 子どもちははも」と歌っているように、親自身が、まずもって自然の道理に逆らわぬ生き方を、日々求め続けて、自らが育ち、芽生えに培える親になる努力を、続ける毎日でありたいと思います。

《教師インタビュー》

「8月6日を語り継ぐ」

(ナレ) 現在、広島市内の大学に勤務する白神しろかみ亜礼あれいさんは、今は亡き祖父に、とてもかわいがられ、平和公園など、よく散歩に連れていってもらった思い出があります。その時に、被爆者である祖父から聞いた原爆の話を、今でもはっきりと覚えています。

(白神) 平和公園に続く川があつて、原爆で亡くなった人は、多くはすごい熱線を浴びて、体が熱いから川に飛び込んで、そのまま亡くなつて。その遺体が、ずーっと一日中流れていたつていう話を聞かされた時に、あまりにも衝撃で

怖かったんですね。それがすごい私の頭に残っていて、恐怖の感情しか残らなかつたんです。

(ナレ) 爆心地に近い広島市内の小学校に通っていた亜礼さんは、学校で熱心な平和教育を受けていました。そのため、学校でも祖父からも、繰り返し聞かされる原爆の話は、あまり聞きたくないものになっていました。

しかし、多くの人に平和の大切さを伝えたいと願う祖父は、夏休み、ラジオ体操に参加した後、子どもたちを集め、原爆の話をしていました。亜礼さんは、恥ずかしさもあつて、話を聞かずに帰ったことを、今でも後悔しています。そして、大学時代にも忘れられない出来事があります。祖父が奉仕していた金光教鯉城りしやう教

会では、原爆が落ちた8月6日に、毎年、慰霊祭をお仕えしていました。

(白神) 8月6日の慰霊祭に、私も参加してほしいって言われたんですよ。祖父は、原爆の本をいっぱい遺していて、その中に、祖父が作った詩があったんですよ。その詩をみんなの前で朗読してほしいって言われて。で、すごい反抗的に、「なんかすごいめんどうさいんだけど」みたいなことを言ってしまった。ほんとに今考えたら、ひどい孫なんですよ。8月6日、教会に私はいたんですけど、なんとその日に、お参りがゼロだったんですよ。毎年何人かはお参りにくる人がいたらしいんですけど、その年は誰もいなくて。その時の祖父のつらそうな、さ

びしそうな顔が忘れられなくて。祖父がどれだけの思いを持って、この会をしようとしているのか、その気持ちを全く、くみ取れずにいた自分と、この会に誰も来ないということの危機感。その両方が、当分の間、頭の中から離れなかつたんです。

(ナレ) しかし、その時の思いは胸にしまわれのまま、月日は流れ、結婚して娘ができ、その子が小学4年生になった時のことです。1枚のチラシをきっかけに、亡き祖父の思い出がよみがえります。そこには、「原爆慰霊碑ガイドボランティア」という文字がありました。

(白神) 「原爆慰霊碑ガイドボランティア」を

親子でしましうっていうチラシを、娘が小学校から持って帰ってきて、それが目について。

「原爆？」ってなって。それで申し込もうってなったんです。その動機としては、私は祖父からいろんな話を聞かされてきたり、学校でもいろいろ聞いてきたのに、娘には何も、私のおじいさんが、原爆にあったことも伝えてなかったから。

原爆の恐ろしさとか、平和の大切さを、祖父はすごく大事に思っていた。その祖父の気持ちを、私はものすごくいい頂いているから、身近な娘には伝えんといけんって。

(ナレ) このボランティアは、原爆や慰霊碑について学習し、実際に案内をするというもので

した。参加の動機は他にもありました。

娘が通う市内の学校も、毎年8月6日が登校日で、みんな黙とうを捧げ、平和や原爆について学ぶのですが、同じ広島の人でさえ、原爆への思いが違っていたのです。

(白神) お母さん友達と話している時に、「8月6日はもう休ませてもいいよね」みたいな話がよく出てて、8月6日の登校日っていうものの重さっていうのが、すごく薄れてきてるなって感じて、それもすごく怖いなと思って。8月6日の登校日は、その日に何があったって、再認識する日でもあるし、その日に亡くなった御霊様へのお祈りをする日でもあるから。すごく大事な日だから。

(ナレ) ボランティアに参加したことで、親子でより深く原爆の勉強ができ、何より祖父の話を娘に伝えることができました。そして、その様子がニュースで流れ、思わぬ展開が生まれま

す。

(白神) 最初、地元の10秒くらいのニュースだったのが、全国テレビのニュースで放送された

んです。今度は、おじいさんの原爆の体験と、それを知らうとしている親子についての、ドキュメンタリーを作りたいと思ってるんで、密着させてくださいっていう話になって。それで祖父の被爆体験が全国放送されて、さらにそれが英訳されて、全世界に発信されてっていうふうに、流れがバーって広がっていった。それこそ

本当に御霊様の働きでしかないってどうか。祖父の思いが私を動かして、そこからそれだけの広がりを見せていったという、すごい体験をさせていただきました。

(ナレ) 一方、メディアに出たことで、誹謗中傷を受けてしまいます。

(白神) ボランティア活動をよく思われない人がいて、批判もあるんですよ。偽善者とか言われたりね。もうやめてしまおうかなっていうふうに思ったこともあったんですけど、大事にしている金光様の教えで、「おかげは和賀^{わが}心^{こころ}にあり」っていう教えがあるんですけど。私はその教えを、「自分の思いを変えることによつ

て、自分を変えられる」っていうふうに頂いてるんです。誰が何を言おうが、祖父の気持ちも伝えたいと思ってるから、それを続けたいもあるし、続けていけないといけないっていう。私の思いを、この教えがすごい後押ししてくださっていると思っていて。

(ナレ) 爆心地の近くで被爆し、周りがみな即死の中、生かされた祖父。その祖父の貴重な生の声を聞かせてもらったのだから、その意思を受け継ぎたいと、亜礼さんは今も祖父の写真に語りかけます。

(白神) 続けるよって。やめてないからねっていうね。そこで確認し合うっていうかね。続け

ていくってことが大事かなって。ちょっとずつ進めていけばいいかなって。

(ナレ) 生涯をかけて原爆を伝え続け、亡くなつてなお、平和を祈り続ける祖父の思いを胸に、亜礼さんは、ガイドボランティアに参加します。そして、数ある原爆慰霊碑の一つひとつに存在する物語を丁寧に調べ、勉強を続けます。

《平和》

「仲良うに暮らしたらええのに」

(ナレ) 兵庫県にある金光教出石教会いずしは、出石城跡や出石明治館などの歴史的建造物が周囲に多く残っており、趣のある、のどかな雰囲気にも包まれています。

そんな出石教会に、娘さんと一緒にお参りする山本登代やまもととよさんは、95歳と高齢ながらも、とてもお元気で朗らかな女性です。

登代さんは、一人っ子な上に、幼い頃は体が弱かったので、両親にとても大切に育てられました。しかし、13歳の時に太平洋戦争が始まり、登代さんは、学徒動員で出石の親元を離れ、明石あかしの工場に行くことになりました。

(山本) 自分としては、みんなが行かれることですし、良いところに行くような気になっちゃって、「私も行きたい」言うて。それでみんなとそろって、明石の飛行機工場に行かせてもらったんです。

そこでとっても良い方に会って。女の方ですけど、毎日ノートにいろいろ書いておられるんで、「いつも気になっとるんですけど、何を書いておられるんですか？」と尋ねたら、「家は家が貧乏で、学校を出とらん。本や何かを見て、これは読んだほうがええなと思ったら、それを読ませてもらって、そしてノートに書いて」と言うて。まあそんな人があるやらと思つて。給食が出ましても、お弁当箱から移して、「それどうするんですか」と聞いたたら、「弟た

ちに食べさせてやりたいから持って帰る」言うて。もうびっくりしてしまつてね。自分も食べべんさらないけんのに。

(ナレ) 比較的、裕福な家で育つた登代さんにとつて、工場で出会う人の話は驚くことばかりでした。そして、寮での生活も初めての経験でした。

(山本) 寂しかったですけど、わりと早く慣れました。女ばかりですんで、夜は、にぎやかにおしゃべりできたりして。みんなそれぞれに言わんだけで、帰りたい気持ちはあつたんじやろうと思えますけど。みんな元気でいろいろな話をして、楽しいに。掃除でも、家でようしと

る人なんかは、お部屋の掃除もタツタツタさせますし。そういうことも見とつて、家ではずいぶんしとんさるんやな、こういうことせんならんのやなということ、私も勉強になりました。

出石の隣の宿舎に豊岡とよおかの女学校が入つとんさつたです。割合調子のええ夜なんかは、こつちも向こうも窓を開けて、歌、歌ってみようか言うて。豊岡が歌う。そのお返しに、今度は出石が歌ういうような、そういうこともありました。懐かしいなと思ひ出します。でしたけど、寂しいのは寂しかったです。そして夜中に、ウーとサイレンが鳴り出したら、ああ、出石に帰りたいと思ひましたし。

(ナレ) 一方、その頃の出石には、空襲の激しくなってきた神戸（こうべ）の町から、子どもたちが疎開してきていたそうです。その様子を、登代さんは、父親の手紙で知りました。

(山本) 出石の町に神戸のほうから疎開してきて、縁故疎開なんかできんで、先生が引率して、疎開してきたんですって。私らは明石において、帰りとうて帰りとうて。私がそういうこと言うもんで、父が手紙くれて。今、神戸から子どもさんが、男の子がようけ来とる言つて。それで、うちの近くに銭湯があつて。その子たちは、お寺さんに住んどつたもんで、そこにはお風呂がなくて、その近くの銭湯に来るんですって。それで、お風呂に入る時、お風呂の前にみんな整

列して、「お父さんお母さんありがとう」言うて。そんな言うんですって、子どもが。もう泣けて泣けてしゃあないつて、父が言うとりましたけど。

(ナレ) 親子が離れて、寂しくつらい思いをしていたのは子どもばかりではありません。
(山本) 出石に帰つて来て、また明石に行く時に、父が郵便局の所まで送りに来てくれたんです。バスが動き始めて、ふと父のほうを見たら、泣いとるんだわ、ポストの陰で。自分は隠れたつもりです。でも、バスが動いたら分かります。まあ、お父ちゃんが泣いとる言つて。まあ本当、あれには参りましたな。こっちのほうが悲しく

なっちゃってね。こんな所にまで来て泣かんでもいいのに。恥ずかしいし、私も悲しいしと思
って。

(ナレ) 当時、登代さんは、娘を思っ
て泣く父親の姿を恥ずかしく思ったのですが、自分が親
になって、その時の父の気持ちが分かったと言
います。

「戦争についてどう思いますか？」と尋ねると、
登代さんは、少し遠くを見ながら、次のように話
してくれました。

(山本) 私が明石の工場に行つとる時に、日本
中から大学生が動員で来とんさつて。その人が
兵隊で行きなさることになった時、まあかわ

いそうに
な事し
ってね。
出征せ
てあげ
ですけ
す。未
と、あ
ろうか
んです
したも
と思っ

て、本当に思いました。こんな馬鹿な事しとらんでもええのに、戦争なんて、と思
ってね。それで、ちゃんと地元に戻ってから
出征せなならんで、そこで一遍、職場で見送っ
てあげて。北海道やら、青森から来とんさつた
ですけど、帰つてそこから出征されたと思いま
す。未だに私、こんだけ月日が過ぎたけど、ふ
と、あの生徒さんたちどうやろう、帰られたや
ろうかなあと思います。本当に無駄な事したも
んですな。何の為に戦争するんやろうな思いま
したもん。仲良うにして暮らしたらええのにな
と思つて。

(ナレ) 登代さんのお話を伺つて、戦時中も登
代さんたちは、笑顔を忘れずに、その一時いっとき一時

の幸せな時間を、大切にして暮らしていたのだ
と思いました。そして、その幸せな時間、大切
な人が、明日はどうなるか分からない。そんな
恐ろしさで悲しさが、戦時中は常に傍らにあっ
たのだということも感じました。

戦争になれば、子どもも大人も関係なく、善
良な人が善良な人の命を奪う。そんなつらい事
が当たり前になります。

「仲良うに暮らしたらええのに」という登代
さんの願いが少しでも実現するように、平和に
ついて考え、努力していかなければいけないと
思いました。

《平和》

「それが戦争」

(ナレ) 稲葉いなば聰子さとこさん、93歳。毎日、畑の様子を見たり、金光教の教会にお参りしたり、とてもお元気です。

稲葉さんは、兵庫県三田さんだ市で4人きょうだいの長女として生まれました。戦争を経験していません。

(稲葉) 私は昭和5年、11月26日生まれ。当時というんか、物心ついた頃は、おじいさん、おばあさんと両親、それからまだその頃は、きょうだいには私と妹と2人だけ。その後にもまた2人できたけどね。

(ナレ) その頃は、お父さんと妹と一緒に、汽車で宝塚たからづかまで行って歌劇を見たり、温泉に入ったり、贅沢もしていたと話されます。

しかし、昭和12年に日中戦争、昭和16年に太平洋戦争が始まり、日常生活は徐々に戦争に脅おびやかされていきました。

(稲葉) 昭和18年に憧れの女学校に入った。その頃は、まだお父さんもあった。そやけど、女学校へ入ったって、ともかく勉強よりも作業。食料増産、勤労奉仕ですわ。せやから、まず運動場を開墾して、さつまいもを植える。運動場いうたら、大きな石ころを、ころころころころ転ばして、いっぱい、いっぱい砂やらを入れて固めてあるから、そつら固いんよ。それを開墾

してな、さつまいもを植えんねん。ほんだら、また近くの農村でも、若い人が工場やら、兵隊さんに取られて、人手がないから、そこへ私たちが勤労奉仕に行くの。山へ行つて、薪を取ってきて、それを背負つて、学校へ帰つてくんねん。そんな一日やつたんよ…。ほんま勉強なんかしたことない。ほんまに私らは、勉強は谷間やなあ。何にもないわ。中学1年、2年、3年、その頃いうたら、何でも知識入る時やねんけどね。そんな頃に、そんなことばかりやつて。西洋の音楽はいかんとか、小説を読んだらいかんとか、映画は見たらいかんとかな、もうそんなんばかりやつた。そやから私らは、何にもないわ。頭、がらんどやわ。

まあこんなはしょうないけどなあ、各家に

防空壕を掘った。家の前には、防火用水を貯めて。家の中の電球は、今はこんなやけどねえ。昔は球が付いとったんよ。警報が出たらその電球に黒い布を被せて、真つ暗にして、警報が止まるまで息潜めて待つてんねん。そら怖かったで。あの音がなんとも言えん。

今でもねえ、あの、B・29で知ってる？ 大きな編隊や、B・29の編隊飛行と、その独特のうなり声がねえ、すごいねん。あれはなあ、今でも疲れた時にうなされるわ、あの音には。今でもそんなことあるねえ。怖かったで。

(ナレ) 女学校では、勉強ではなく一日中勤労奉仕。娯楽も許されず、空襲警報に怯える毎日。

そんな緊張した日々の中、稲葉さんが13歳の時、

お父さんに召集令状がきて、お父さんは出征していききました。そして、そのまま終戦を迎えます。家族はみんな、お父さんの帰りを待ちわびていました。

(稲葉) 昭和19年7月に、お父さんが36歳7カ月で、両親と妻と子ども4人を残して出征した。私は女学校2年や。末っ子の弟はまだ2歳前や。お父さんが行ったのは19年の7月から、もう終戦の直前、1年前や。老兵をかき集めてな、もう無茶苦茶しよったんやと思うわ。1年後の8月15日が終戦や。ほんなら、おばあさんは、もう戦争がすんだから、お父さんは帰ってくる、帰ってくる言うて、毎日、神さん仏さんに祈りながら、待ち焦がれとったけども、いつまでも

放っておくわけにはいかんからな、政府としても。2年後の、昭和22年の5月に、お父さんらはどこでどうなったか分からへんけれども、ともかくその頃に戦死したのであろうとして、認定公報(戦死公報)というのやけど、それがきたんや。そしたらね、そのお父さんのお葬式を済ませたら、おばあさんがガツクリとなって、シヨック死した。そやから、1週間に2人のお葬式をした。したいうてもお母さんがしたんやなあ。お母さんしつかりしとったと思うわ。

あの頃は、太平洋戦争でも何でも、「聖戦」というて。その聖戦という名の下で、お父さんの命は、もう無理矢理に断ち切られて。ほんで無残に引き裂かれた家族の悲運とか苦しみは、到底言葉で言えるようなことではない。言葉に

したらもう安くなる。ほんま言葉では言われへん。経験した者でなかったら、分からんと思う。せやから、今、戦争を知らないお坊ちゃんたちが、何してくれるんやろなあと思う。

戦争はほんまに残酷すぎると思います。

(ナレ)「お父さんは、どこでどうなったかは分からない。おそらく戦死したのであろう」と、国から死亡を認定される。そんなことを、果たして受け入れることができるのでしょうか。

勉強も楽しみも安心も、命さえも奪われる。そして、それを黙って受け入れざるを得なかった。それが戦争。

戦後79年を迎えた日本で、戦争と平和にどう向き合っていくのか。稲葉さんの、言葉では言

い表せない悲しみを、戦争を知らない私たちも、忘れてはならないと強く思わせられるのです。

《教師インタビュー》

「かけがえのないわが子」

(ナレ) 岡山県にある、金光教乙島教会おとしまで奉仕する岩本信治いわもとしんじさん、48歳。2歳下で金光教教師である妻のふく代先生とは、40歳の時に会いました。にこやかな笑顔と、神様に向かう真っ直ぐな姿勢が、印象的だったといいます。ほどなくして、2人は結婚。夫婦生活は苦労もありましたが、神様に心を向け、力を合わせて、日々を過ごしてきました。

そんな夫婦の一番の願いは、わが子を授かること。しかしそれは、簡単なことではありませんでした。

(岩本) おかげさまで、結婚させていただいて早々に妊娠が分かりまして、ふたりとも喜んで。無事に生まれてくるようにということで、願って過ごしていたんですけれども、どうも赤ちゃんの状態がですね、大きくならないといえますか、怪しいと。結局、流産ということになりました。とてもショックを受けました。

医師の診断によると不妊症ふいんしょうというものに該当するようで、妊娠はするけれども、そこからなかなか育っていかないと。その不妊症ということを受けて、夫婦で話し合っただすね。私たち自身がまだ育ってないから、不育だからそうなってしまっうんじやないかという、信心の足りなさを、お互いに反省したり、嘆いたりすることもありました。

そういう中で、御本部でお取次を頂いたりしますと、金光様からですね、「世の中では『不妊治療』というふうに言うかもしれませんが、子ども、このお道では、『懐妊治療』と言いますから」というふうにですね、仰っていただいて。

(ナレ) 流産の経験と不育症の診断に、わが子の誕生を願うふたりは、大きなショックを受けます。そんなふたりを支えたのは、金光様の「懐妊治療」という言葉でした。不妊を治すのではなく、懐妊を願っていく。そう心の向きを変えて、諦めることなく、前向きに取り組み続けます。しかし、それからも妊娠はするものの、最終的には流産に至ってしまふ。その繰り返して、ふたりの心は沈んでいきました。そんな時、医

師から提案されたのが、体外受精でした。

(岩本) ふく代先生は、4回流産して、自然に授かるのは難しいという中ですね、お医者さんのほうから、体外受精というものを勧められました。ただ、年齢的に、特にふく代先生の体に負担が大きいということもあって、一回限りですけども、願いを立てて、体外受精をさせてもらうことになりました。

いよいよ明日、体外受精がうまくいくかどうかという、その前日にですね。倉敷市の児童相談所のほうからお電話がありました。

(ナレ) その電話は、「里親として、現在8カ月の男の子を預かってもらえませんか？」とい

うものでした。

(岩本) その数年前に、里親として我々も登録してたんですね。流産を2回、3回と繰り返し返していく中で、本当に命を授かるということが簡単じゃないと。むしろ奇跡的なことなんだなと。それと同時に、私の中で芽生えてきた思いというのがですね、この世の間に生まれてきた子どもさんは、自分の血がつながっていない子どもであっても、本当に尊いことだし、大切にしていきたいなという思いが芽生えてきてですね。

そういう道があるんであればということ、研修に行かせていただいて、登録してたんですね。

(ナレ) 里親登録はしていたものの、数年間、

音沙汰はありませんでした。それが、体外受精の結果が出る前日に、連絡がきたのです。もちろん、結果が出てから判断してもよかったです。ですが、2人はそうしませんでした。里親を頼らざるを得ない子どもがいるのなら、わが子を授かったとしても、一緒に育てていきたい。そう心を決めて、子どもを受け入れると返事をしました。

次の日、医師から聞かされたのは、ふたりが望んだ結果ではありませんでした。

(岩本) 私もそうですし、特にふく代先生はですね、とても落ち込みまして。今までにないような苦しみを、味わうことになったわけですけども。頭の片隅にですね、昨日、その児童相談

所から預かってほしいという連絡を受けてたな、ということが、ふたりにとっての生きる甲斐と言いますか、そのことで、救われたふたりがいたなあというふうに、今振り返ると思っています。もしそういうものがなければ、ふたりともどうなってたかなあというふうに思いますね。

本当に神様がですね、先回りをして、そういう生きる道を用意してくださったのかなというふうに、今振り返って思わせていただいています。

(ナレ) しばらくして、正式に里親として子どもを預かることになりました。その後、さらにその子の弟も預かることになります。幸いにも、

子どもたちは、新しい環境にすぐに慣れてくれました。始めは、子どもを受け入れることに不安もありましたが、子どもたちの成長していく姿、元気に遊んでいる姿を見ているうちに、その気持ちも次第に薄れていったそうです。

(岩本) もうすっかり家族というかですね、私たちにとっても、かけがえのない、子ども同様の存在になってくれています。くっついて寝てる寝顔とか見ると、本当に兄弟というのはいいなあっていうふうに、夫婦で話したりしてますけども。

毎日振り回されて大変なんですけど、こうやって、世の中のお父さん、お母さんは子どもさんを育てておられるわけですし、私たちもそう

やって育てていただいたんだなっていうことを、感じさせていたただきながらですね。

日々、神様が下さったおはからい、お授けくださった救いの手といえますか、そういったお働きを感じさせていたただきながら、日々の生活をさせていたただいているという感じですよ。

(ナレ) ふたりが思い描いた、懐妊治療ではありませんでしたが、岩本さん夫妻は、この世に生まれてきた子どもたちは、血のつながりに関わらず、みんな尊い命なんだということに気づきました。そうして出会った子どもたちは、かけがえないわが子そのもの。子どもたちの健全やかな成長を願いながら、家族仲良く暮らしています。



「生きる楽しみがない

／整形しようかな」

おはようございます。大阪府にあります、金

光教 鳳教会の工藤由岐子と申します。

まず最初のお悩みは、65歳の祐一さんからで
す。

「退職し、年金生活が始まりましたが、振り
返ると、うれしいことなどほとんどない人生で

した。家族を支えるために、小学生の時から新
聞配達をさせられ、寝たきりの祖父母の介護も
手伝わされました。会社でもパワハラに耐えな
がら安月給で働かされました。そして一昨年、

妻とは死に別れ、子どもたちも独立して、家を
出ていきました。寂しさもあり、生きていく楽
しみが見出せません…」

このようなお悩みです。

私はお話を聞かせていただいて、じわーっと
涙が出ました。祐一さんは、これまで本当に辛
抱して頑張つてこられたんですね！ 会社での
パワハラというのは納得できませんよね。改善
策があれば良かったのですが、よく続けてこら
れたと思います。

そしてその後は、奥様が亡くなられて、子ど
もさんも独立されたのですか。家族が減るとい
うのは、環境の大きな変化ですね。お察しまし
ます。しかし、祐一さんは結婚して、子どもさん

を立派に育てあげられたのですから、そこは自信を持ってください。

それに、昔、小学生のあなたが、朝早く新聞配達をしている姿を見て、勇気をもらった人もきつといたと思います。しかも、おじいさん、おばあさんの介護のお手伝いもされて、ご両親さんは、どれだけ祐一さんに助けられたことでしょうか。あなたは、「させられた」と言いますが、それができたのは、あなたが優しい人だからだと思いますよ。そして、たくさんの人のお役に立っている。祐一さん、これまで本当にお疲れ様でした！ あなたが頑張ってこられたことは神様が見ています。

これからは、祐一さんの第二の人生を送ってください。あなたは優しいし、まだまだこれか

ら出会いも、楽しいこともありますよ。何かやってみたかったけど、できないままになっていくことはないですか。同じ趣味を持つ人たちの集まりに参加してみるとか。それぞれに皆、山あり谷ありの人生があったと思いますし、共感できる場所もあるんじゃないでしょうか。

お悩みを聞く限り、体の病気はなくて良かったですね。お体はもちろんですが、心も元気になっていただきたいです。もしも、まだモヤモヤして、何もできないということでしたら、教会に一度来られて、胸の内を吐き出してみてください。どんなことでも聴かせていただきます。スッキリすると前にも進めますよ。祐一さんが、どうぞこれからの人生を楽しく送れますようにと、お祈りしています。

次に紹介しますのは、46歳の恵めぐみさんからです。

「私の娘は大学1年生です。高校生の時は、ほとんど休みがないほど部活に打ち込み、受験勉強も頑張ってきました。それはうれしかったのですが、大学生になった途端、お化粧に時間を掛けるようになりました。鏡ばかりのぞき込んでいるなと思っていたら、『私、整形しようかな…』と言い出しました。それを聞いて、健康やかな体に手を加えることや、見た目をこんなに気にする娘になったのかと思うと、悲しくなりました。どう考えればいいでしょうか」

このようなお悩みです。

親というのは、子どもがいくつになっても心配しますよね。私にも娘がいますので、お気持ち、よく分かります。

お話によると、高校時代の娘さん、遊ぶ暇がなかったようですね。ずっと真面目にやっていたのでした。大学生になった途端に解放されて、心が自由になりますよね。お化粧に時間を掛けるぐらい、気持ちに余裕ができたのでしょうかね。お年頃でもありますし、自然なことだと思います。大学に行き、周りを見ますと、きれいなお姉さんも多いですからねえ。ところで、恵さんが気になっっているのは、娘さんが、「整形しようかな…」と言ったことですね。だけど、親の前で言っている時点でかわいいです。まだつぶやいてるだけかもしれませんよ。

しばらく様子を見ましよう。もし本気のようにしたら、そのことを頭ごなしに否定しないで、まず、娘さんの話をちゃんと聞いてあげて、その上で、恵さんの正直な気持ちを言えればいいと思います。親としては、見た目ばかりじゃなく、内面から出る美しさも大事にしてほしいですね。でも私が思うに、娘さんは高校時代、休みがないほど部活に打ち込み、受験勉強も頑張ってきたのですから、内面から美しい人だと思えます。その努力が実って大学生になり、おしゃれに目覚めていく…。これって順調に成長されている証じゃないでしょうか。有り難いことだと思います。

そういえば私も、昔、顔のパーツを気にしていたことがあります。ぱっちり二重の目にな

りたいとか、鼻を小さくしたいとか思っていました。だけど当時、整形という言葉はあまり聞かなかったので、そういう発想にはなりません。もし私も今の時代に生まれていたら、鏡の前でしょっちゅう、「整形しようかな」とつぶやいていたかもしれません。でも、昔から怖がりですから、思うだけで終わっただしょうけどね。

娘さんは今、キラキラした青春時代を送っておられます！ 素敵です。今日の日まで、娘さんが健やかに育ってきたことを喜ばせてもらいましようね。お母様とすれば何かと心配はあるでしょうが、どうか温かく見守ってあげましよう。

《あなたへの手紙》第2回

「父が免許を返納しない

／子どもの病気が怖い」

おはようございます。兵庫県・金光教阪急

塚口教会の古瀬真一と申します。よろしくお願

いいたします。

最初は、京都府にお住まいの42歳男性からのご質問です。

「同居している84歳の父が、いまだに免許を返納しないので困っています。あちこちにぶつけるので、父の車はデコボコ。いつか人に迷惑を掛けることにならないかと心配でなりません。それでも父は、『車がなかったら教会にお

参りができない』と言うのです。そこで質問なのですが、それほどまでに、教会への参拝はしなければならぬものなのでしょうか。また、免許を返納するよう、教会の先生から、父を説得してもらうことはできますか？」

このような内容です。

ご質問ありがとうございます。高齢のお父様の運転、心配ですね。「今すぐ運転をやめてほしい」と思っているも、「教会へのお参りができなくなる」と言われると、お父様が大切にしてきた、心のよりどころを奪うことになりかねないと、心が揺らぐ。お父様への思いが深いからこそその困り事だと感じます。

さて、ご質問の「教会への参拝」についてで

す。何が何でも教会へ参拝しなければならぬ
というようなことはありません。あなたも察し
ておられるように、お父様自身に、「お参りせ
ずにはいられない」という、強いお気持ちがお
ありなのではないでしょうか。

文面からすると、あなたは、お父様が42歳の
時のお生まれのようですね。歳を重ねて授かっ
たあなたのことを、お父様はずっと、教会にお
参りして、祈りを込めてこられたことでしょう。

あなたもそれを感じている。そうならばまずは、
お父様の人生の歩みと、その支えとなつている
神様について、改めて目を向けていただきたい
のです。わが子を思い、神様にお願ひしながら、
災難や病気を乗り越え、長い人生を歩んでこら
れたお父様。そのお父様のおかげで、今のあな

たがあるわけです。

あなたにとつての目下の課題は、お父様に免
許を返納してもらうこと。一方、お父様にとつ
ての課題は、教会にお参りができにくくなり、
神様と隔たりができてしまうことです。こんな
ふうに整理してみると、あなたの心配も、お父
様の神様への深い思いも、どちらも解消できる、
新たな良いあり方が見えてくるように思いま
す。

お父様と一緒に、教会に足を運んでみてはい
かがでしょうか。これまでお父様が、何を祈り、
何を大切に生きてこられたのかなど、教会の先
生を交えて、いろいろお話しなさってみてくだ
さい。

続いては、大阪市にお住まいの「2児の母」さんと仰る女性からのご相談です。

「私は、38歳になる母親です。2人の子どもは、小学校と幼稚園に通っています。子どもが生まれてから、子どもが病気に罹ることが怖くて仕方ありません。1人が病気になる、もう1人にうつさないよう神経質になります。手洗いやうがい、家族に過剰に強要してしまったり、時には、不安で眠れなくなることも…。こんな私ですが、どうしたらよいでしょうか」

このような内容です。

ご相談を読んで、新型コロナウイルスが拡がった時、不安で眠れない日が続いたことを思い

出しました。「感染したら…」と思うと、恐ろしくて仕方ありませんでしたが、あなたは、もう何年も、あのような怖さの中で、お子さんの健康を守るために奮闘してこられたのですね。

私は最近、出産後のお母さんの心理について、思いがけないことを知りました。それは、「この小さく、^{はかな}儂い赤ちゃんの命は、私にかかっている。何としても守ってやらねば…。でも、そんな大仕事、私にできるだろうか…」というような、絶望にも似た孤独を、多くのお母さんが感じるといことです。

あなたも、そんな悲しいまでの責任を背負い、ミルクを飲ませ、オムツを換え、栄養の不足や偏りがないように…と、休む間もなく、2人のお子さんを育ててこられました。それを、ここ

まで成し遂げてこられたことは、本当に素晴らしい、ありがたいことですね。

そんなあなたに、私が今、思い出してほしいのは、あなたのお子さんの成長を喜んでくれている人たちのことです。母親である、あなたに代わりは、誰にもできないけれど、パパやおじいちゃんおばあちゃん、ママ友たち、幼稚園や学校、病院の先生……。たくさんの人たちの支えもあって、今日があるのでは……。そんなふう

に思うのです。

「子どもが病気に罹ることが怖い」とのことですが、もっと熱が上がったら……。もっと息苦しくなったら……。というように、悪いことばかり思い浮かぶのでしょうか。悪い想像どおりになってしまうのなら、それは、とても怖いことで

すが、人間には、健康を保とうとする様々な働きが備わっていることを、思い出してください。ありがたいことに、そういう働きを、神様は、ちゃんと与えてくださっているのです。

お子さんの命に組み込まれた、伸びよう伸びよう、育とう育とう、元気になろう、丈夫になろうとする働きがあり、周りの人の支えもある。尊い働きに支えられての今であることに目を向けて、お子さんの成長を楽しみ、喜んでくださるとうれしいです。

「結婚式をしない娘

／コロナ禍と物価上昇で閉店」

おはようございます。私は、愛知県・金光教

額田^{ぬかた}教会の河邊^{こうべ}芳美^{よしみ}と申します。どうぞよろし

くお願いいたします。

最初は、50歳主婦の方から、娘さんの結婚に

ついてのお悩みです。

「私には27歳になる娘がおり、娘は5年程お

付き合いしている彼と、近々結婚すると言っ

ています。私も気に入っている好青年なので、結

婚すること自体は大賛成なのですが、娘は、『ド

レスを着て写真は撮りたいが、お金を掛けてま

で式を挙げるつもりはない』と言うのです。私

としては、内々だけでも結婚式をと思い、また

主人も、ケジメだと思っっているようです。それ

を娘に言うのは押し付けになるでしょうか」

このような内容です。

それは、ご結婚おめでとうございます。良い

方とご縁があり、ありがたいですね。

お相手と5年もお付き合いしたなら、もしか

したら娘さんは、実質夫婦という感覚なのかも

しれませんね。今さら結婚式に大切なお金を使

うよりは、これからの生活に回したいと、堅実

な考えをお持ちなのだろうと思います。

その一方で、親としては、結婚を軽く考えて

いないだろうかと心配になるんですね。実は

私にも、娘さんと同じ年の息子がいて、私も結婚について、似たような問題を抱えていたので、あなたのお気持ちはよく分かります。

私の息子は昨年結婚したのですが、息子たちは、金光教の教会にお参りして、先生に結婚の報告をしたそうです。すると先生は、とても喜んでくださり、息子たちと一緒に神様に祈りを捧げてくださったといっています。

でも私は、息子の報告を聞いても、それだけでは不十分なように感じていました。息子が生まれてから今日まで、どれほどに神様のおかげを受けてきたか、この結婚も神様から頂いたご縁ではないか。そう思うと、改めて結婚式を挙げて、神様に丁寧にお礼を申し上げてほしいと思っただけです。

そこで私たちは、親子でじっくり話し合いました。結局は、息子の希望に添うことになりましたが、あの話し合いはとても貴重な時間だったと思います。私の願いを伝えることができ、また、息子は息子なりにいろいろな考えがあり、教会にお参りしたのだということも分かりました。今は、あの参拝こそが息子たちの結婚式であり、彼らとしてのケジメだったのだと、私は受け止めています。そして、今、私のできるごととして、神様に、2人が健康で仲良く暮らしている事のお礼と、両家が仲良くできるようにとお願いをしています。

結婚式の形は、いろいろあっていいのではないのでしょうか。むしろ、親子や夫婦が、わざわざ話し合える間柄になっていくことのほ

うが、ずっと大切に思っています。お互いに気持ちを通い合わせ、娘さんのご結婚を、心からお祝いできますことをお祈りいたします。

次に、ラーメン店を営んでいる46歳の男性からです。

「私は、ラーメン店のオーナー店長をしています。自分で店舗の立ち上げをし、20年にわたって店を切り盛りしてきましたが、コロナや昨今の物価の値上がりから、資金繰りが苦しくなり、閉店することにしました。常連さんからは、『やめないで』と言われていますが、『自分にもっと力があれば』と落ち込み、閉店までやる気が保てません。どうしたらよいでしょうか」

というお悩みです。

それは、大変でしたね。大きな世の中の流れには抗えず、ここで見切りをつけたほうが損害は小さくて済むと、身を切られるような思いで閉店を決断されたのでしょうか。ご自身で立ち上げ、育ててきたお店であれば、わが子も同然ですよね。悔しさや寂しさで、さぞかし、お力を落とすの事と思います。

でも、「自分にもっと力があれば」なんて、ご自分を責めないでください。20年もの間、辛抱に辛抱を重ねて、山も谷も乗り越えてこられたじゃないですか。お客さんに喜んでもらいたい一心で、ラーメンの一杯一杯を精魂込めて作ってこられたのでしょうか。だから常連さんまで

き、うれしいことに、「やめないで」と言ってくださる。ありがたいですね。

そして、ここまで頑張ることができたのは、そういうお客さんたちが、あなたの店を選んで支えてくださったこと、ご家族の理解と協力があつて元気に働けたこと、仕入れ先の方々にもお世話になってきたこと、それらがあつてのことでしょう。多くの方々にお世話になって、今日があると思うんです。皆さんのおかげですね。また、苦労を共にしてきたお店にも、これまでの感謝をすることも大事だと思うんです。そのことを、じつと思ひ返してみてください。閉店までの間は、せめてもの恩返しをする大切な期間だと思ってみませんか。お客さんの喜ぶ顔を見ると、あなたも幸せを感じるのではな

いでしょうか。今後の生活も心配でしょうけれど、今から閉店までの働き方が、後々の人生にも大きく響いてくるように思います。

そうはいっても、心というものは、なかなか自分の自由にならないのですよね。頭では分かかっていても、いろんな思いが入り混じり、モヤモヤしてやる気が出ない。そういうこともよくあるものです。どうしても心が前向きにならないようであれば、そのモヤモヤした気持ちを吐き出しに、金光教の教会を訪ねてみてはどうでしょう。教会ではそういう悩みを聞いてくれます。そして、心をすっきり整えるお手伝いをしてもらえますよ。思い切つて、お近くの教会を訪ねてみませんか。

《あなたへの手紙》第4回

「長生きしていいことがある？」

／お墓のことが気掛かり」

おはようございます。兵庫県にあります、金

光教出石教会の大林誠おおばやし まことと申します。よろしく

お願いします。

最初は、たか子さんという56歳の主婦の方の
お悩みです。

「最近、急速に身体が衰えていくのを感じて
います。疲れがなかなか取れませんし、ちょっ
と無理をすると、すぐ腰が痛くなり、夫に手伝
ってもらっています。50代でこの調子だと、10
年後、20年後はどうなるだろうか、長生きして

良いことがあるだろうかと、とても不安になり
ます。生き生きとしているお年寄りを見ると、
すごいなあと思います。私はそんなふうにな
れそうもなく、将来に希望が持てません」

こういうお悩みです。

本当に、年を重ねるにつれて、体にいろんな
変化が起こってきますよね。そして、その変化
をなかなか受け入れにくい。よく分かります。

江戸時代の武士で、横井也有よこい やゆうという人が、こ
んな狂歌を詠んでいます。

○皺しわはよるほくろは出来る背はかゝむ あたま
ははげる毛は白くなる

○手はふるふ足はよろつく歯はぬける 耳は聞

へず目はうとくなる

○くどふなる気短かになる愚痴に成る 思ひつ

くこと皆古ふなる

○聞きたがる死にともながる寂しがる 出しや

ばりたがる世話やきたがる

60代の私には、ズキンとくるものばかりです。

でもこの作者は、どういう気持ちでこれらを作ったのか。どうも、老いゆくわが身を嘆いてというよりも、逆に面白がつているような気がするんです。ネットでシルバー川柳を検索してみても、実に多くの方々が、自分自身の老化を嗤^{わら}う素敵な作品を編み出しています。「生き生きとしてのお年寄り」とは、たとえ体は弱くても、こういうセンスを持った方々のことでは

ないでしょうか。

年を重ねることで、ようやく見えてくることがあります。たか子さんも、いろんな発見をされたことでしょう。若い頃は、年を取ると、こんな気持ちになるなんて想像もできなかった。

親たちも老化に伴う苦勞が、いろいろあったに違いない。それなのに、親の愚痴っぽさを批判したこともあったなあ。気の毒なことをした…。そんな反省ができるのも、少し賢くなれたということです。夫婦でしみじみと、そんな語りができるのも、人生の味わいではないでしょうか。

体が健康でなければ生きがいを持たないとか、経済的に豊かでなければ自分らしく生きられないとか、そんな価値観にいつまでもこだわ

っていると、年を取ってからの人生は、とても惨めなものになってしまいう危険性があります。

健康もお金も、いつ消えてしまいうか分かりませんからね。

ですから、死ぬまで決して消えることのない生きがいをしつかりとつかんでいくことが、たか子さんの、いや、若い人も含めて全ての人の大きな課題ではないでしょうか。金光教の教会では、楽しみながらそのことに取り組んでいきます。

念のために付け加えますが、疲れが取れない、すぐ腰が痛くなるというお悩みでしたね。それは本当に年のせいなのか、放っておいてよいものかどうかは分かりませんから、お医者さんにも診てもらってくださいね。

次は70代の主婦の方のお悩みです。

「母が105歳で亡くなり、先日、先祖代々のお墓に納骨を済ませたところです。次は私たち夫婦の番かと思うと、先々のことが気にかかります。一人息子は結婚して、遠方で暮らしていますが、子どもは授かりませんでしたので、この家系は息子の代で途絶えることになります。そこで、息子たちに課題を先送りすることのないように、元気なうちにできることをしておきたいのです。何をどうすれば、亡くなった両親や、先祖たちに安心してもらえますでしょうか」

このようなお悩みです。

105歳ねえ。お母様はご長命を頂かれましたね。

皆さんで心を込めて、お世話をしてくられたんじゃないでしょうか。お母様への思いが、「どうすれば安心してもらえるか」という言葉からも伝わってきます。そのお気持ちそのままに、ご先祖のお墓も大切にしてこられたんでしょう。

お墓というのはありがたいもので、それがあのおかげで、亡くなった人たちがいつまでも慕わしく思えるんですよ。遠くからお参りする、「よく来たなあ」と声が聞こえる気がする。掃除に汗を流せば、喜ぶ笑顔が臉に浮かぶ。愛されて育った懐かしい記憶がよみがえって、元気が出る。息子さんたちご夫婦にとっても、先々、そういう大切な場所になるんじゃないでしょうか。ですから、「墓じまい」などというこ

とを早くから考えないほうがいいですよ。お墓を重荷のように思うのではなくて、むしろ力強い心の支え、あるいは人生の道しるべのように、感じるようになってくれるといいですね。そこで、元気なうちに取り組むべきことは、先々、お墓がそういうありがたい場所になるように、息子さんたちとの間柄を、より良いものにしていくことではないでしょうか。

もちろん、息子さんたちのために、ご先祖をもっと身近に感じられるようにしてやりたいという積極的な願いがあつて、お墓をどうするか、考えておられるなら、それも良いことなのかもしれないですね。息子さんたちとよく話し合って、ご先祖を大切にすることを伝える機会にしていたきたいと思います。

《特選アーカイブス》

「心の通い」

兵庫県・鶴甲教会 田中潤

(昭和53年9月25日放送)

今日、社会福祉とか福祉国家とか、福祉という言葉に、私たちはかなり馴染んでまいりました。事実、福祉行政はある程度進められてきたわけで、制度の面や施設の面で、少しずつ整備されてきつつあるようです。今後も一層充実されることを願うのですが、ここで改めて問題になりますのは、人間自身であり、福祉に関わる人の心であります。

例えば、心身障害児のための施設が建設されたといっても、そこにわが子を送り込んでおい

て、その後は訪ねることもせず、放っておくよ
うな親があるとすれば、それは本当の福祉には
つながらないことになります。福祉の必要が叫
ばれ、そのための環境が次第に整えられてくれ
ばくるほど、いよいよ大切なものは、その福祉の
仕事に就く人の深い思いやりの心であり、その
恩恵に浴する人の感謝や忍耐の心であります。

そうはいうものの、現実には、その願わしい
心をしばしば見失いがちであり、実践できがた
い人間の弱さに出くわします。その弱さを見つ
め、それを乗り越える力を与えてくれるものと
して、信心は大きな働きを現します。

神戸市のTさんは、現在、中学校で養護教育
に携わっておられる青年です。数年前のこと
ですが、Tさんの担当するクラスに、耳が聞こえ

ず話をすることもできない、ろう者であるA君が派遣されてきました。

人と人は、例えば、言葉をとおして意志が通じ合い、理解し合えるわけですが、その手段を失った1人の生徒を、大勢の子どもとともにどう育てていけばよいのか、それがその日からのTさんの課題でした。

初めのうちは、身振りや手振り、時には絵を描いたりして、意志を通じ合ったのですが、やがてそれにも限度があることを知りました。また、クラスの他の生徒たちも、「耳が聞こえず、話もできないのに、毎日よう学校へ来て、偉いなあ」と感心しながら、あれこれと親切を尽くしていたのですが、それも時が経つにつれて、意志の疎通の難しさにやり切れなさが募ってい

くようでした。

Tさんが、「みんな、A君を仲間に入れてんのか」と尋ねますと、「先生、そやけどA君とはやっぱり通じへんもん、しょうがないやんか」と返ってくるのでした。「しょうがないやんか」という生徒の言葉に、実は自分も感じていた限界というものを、改めてはつきり感じ直したとTさんは言われます。

そもそもTさんが養護教育に関心を持つようになったのも、幼い頃から金光教の信心に育てられ、いたわりや思いやりの心を大切な価値として、自然に身に付けてきたところからのことでした。さらには、全ての人間は神の子である、年老いた者も、病弱な者も、恵まれない者も、どんな人も、一人ひとりが、かけがえのない生

命を神より与えられた者として、疎外されてはならない、大切にされねばいけない、という信心に支えられてのことでした。

ところが、今や、その思いやりの心が、また、人間尊重の心が、A君の現実の前に、行き詰まりを見せてきたのです。他の生徒たちの善意も同じように、挫折しようとしております。

しかし、信心というものは、行き詰まりの中でこそ、一層深まりもし、成長もするものです。Tさんも、毎日真剣に神に祈ったと言われます。祈る中で、その行き詰まりから逃げるのではなく、何とか切り拓く道を頂きたい、という願いがいよいよ強くなったある日、教会の先生に教えを請うたのでした。

先生は、「高い所から引き上げようとするか

ら無理になる。自分が下に降りて、子どもを押し上げてやればよい。あなた自身がろう者になればよい」と言われたのでした。「ろう者になれ」という言葉は、まさに神の言葉として、Tさんの心を深く捉えたのでした。

やがてTさんは、その言葉を受けて、学校がひけたあと、毎晩、手話を習いに通いました。そして、少しずつ覚えた手話で、A君と会話ができるようになり、2人の溝は次第に埋められていきました。Tさんは、さらにその手話を、クラスの生徒たちにも教え、A君と生徒たちとの間にも会話ができるように努めるのでした。

中学1年を終えて、2年生になった時、思いがけないことに、A君が学級委員に立候補する話が持ち上がりました。クラスの中では、「A

君にできるかなあ」と危ぶむ声がありました。あるいは、「人の世話をする立場に立つのも、これから社会に出たら役立つよ」という声もあって、みんなが盛んに討論をしたあげく、立候補を認めることになりました。

結果は、対立候補があつたので、14対12で敗れましたが、しかし、ここでA君が成長し、クラスの生徒たちとも打ち解けてこれたことを、Tさんはありがたく神様にお礼申し上げたと言われます。

人間には誰しも、思いやりの心があり、どんな人をも大切にしたい心を持ち合わせております。金光教では、そういう心を、神様から人間に与えられた神心かみこころと呼んでいます。

その神心を、どこまで大きく豊かに持ちうる

人間になるのか。それには、神心が挫折するよ
うな難しい現実に出合うたびに、神に祈りつつ
自己を見つめ、教えに目覚めることによって、
今までの自分の殻が破れて、新しい自分に生ま
れ変わる必要があります。それが修行であつて、
そうした修行をたび重ねるうちに、揺るがぬ神
心の実践者となるのでありましょう。Tさんは、
その貴重な歩みの一端を、私たちに語ってくれ
ただと思えます。

金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

朝日放送 木曜日 あさ4時35分

放送センターHP
「こころで聴く
おはなし」



「こころで
聴くおはなし
Podcast」



放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。